

地区記者懇談会開かれる

平井ガバナーが公式訪問アドレスの中で、1枚の写真を取り出し掲げて見せると、会場の空気が動くというか、明らかにリアクションの起きるのが分かる場面があります。アドレスの後半に指しかかったあたり、ロータリー財団への協力を呼びかける時です。

その写真はアフリカの草木もない荒地にやせ細った、まるで骨だけになったような子供がうすくまっけていて、その後方に一羽の秃げ鷹が射抜くような目で立っているのです。ポリオに侵され今まさに息が絶えるのを待っている図です。

ロータリー財団への協力を呼びかけながら、平井ガバナーが言葉少なくもっとも雄弁になる時です。これが広報・報道の力です。

平井ガバナーは今年度の重点目標の一つに広報の強化を挙げておられます。各クラブが実施する活動をマスコミが誌上や電波で伝えてくれたらロータリーの公共イメージ向上のもっとも有効な手段となります。ですから、平井ガバナーは就任後の早い機会に報道各社、しかも第一線の記者との懇談会を提唱してこられました。経済人の多いロータリーの性格を勘案して経済記者クラブとの第1回懇談会が9月22日金曜日の午後5時から京都ホテルオークラで開催されました。

ロータリー側は平井ガバナーを始め西村二郎研修リーダー、橋本長平ガバナーエレクト、小林哲夫R.I.元理事千玄室秘書役、そして地区の全委員長、副幹事団が出席し記者から何を聞かれても即答できる体制で臨みました。

ところが、開会が30分遅れました。記者が揃わなかったからです。確かに夕刻の5時という時間帯は朝刊用の送稿などで忙しい時間帯でしょうから記者の側してみれば、自分ひとり

ぐらい遅れても他社の人がいるだろうと思ったのかもしれませんが。最初から欠席通知の社も何社もありました。報道各社がロータリーをどう見ているか、分かりやすい回答を得た思いがいたしました。

マスコミとロータリーの関係を考える時に地域差が生じるのは当然で、大都市になるほど取材情報が溢れるほどあるから、敢えて優先順位というならロータリーは低く見られているのが現実だと思います。だからこそ第一線記者との懇談会を開いたのです。

平井ガバナーから出席者へのお礼と今回の懇談会への熱い思いを語っていただき、各委員会から事業計画などをお話しました。記者にしてみればロータリークラブがそれぞれの地域で実施する催しやスポーツイベントの取材をすることはあっても、ロータリー全体としてポリオ撲滅に何年も取り組み、ポリオは99パーセントまで根絶にロータリークラブが貢献したこと、途上国に安全な水や識字率向上など、様々な支援活動を展開していることを始めて知った記者も多かったと思いました。世界社会奉仕委員会が報告したトンガ王国にソーラーシステムを活用したワクチン、医薬品保冷保管設備、飲用雨水タンク設置への協力事業は翌日の京都新聞でも報道されました。懇談会の成果が早速現れたこととなります。懇談会の後に開かれた懇親会の席で、西村二郎研修リーダーは京都市域で始めて開催されたこの日の懇談会を高く評価され、年毎の継続を願って乾杯されました。多くのクラブがCLPを取り入れ対外広報、対内広報共に新しい取り組みが求められています。その確かな第1歩となった懇談会でした。

(文：広報・IT・雑誌委員長 武部 宏)



京都新聞 2006年9月23日



報道関係者

